二次元ぷち文庫

諦堕の勇者ルドベキア

木森山水道

表紙イラスト：有都あらゆる

2D PETIT POCKET NOVELS

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『諦堕の勇者ルドベキア』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

諦堕の勇者
ルドベキア
木森山水道
表紙／有都あらゆる
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

ルドベキア

魔王を倒し、救世主となった女勇者。ただの村人だったが、力を得て勇者として認められ、魔王を討伐した。

アリナ

ルドベキアが訪れた村の村娘。ルドベキアに憧れる。

ダルナモ

オーガたちを統べる王。

★第一話　オーガ王ダルナモ★

【魔王】（虹源書房刊「世界の魔族大全」より）

人類に対し極めて深刻な害悪を広範囲に渡って与えた、または与えうる存在。勇者の場合と同じく世界会議によって認定される。（中略）現魔王ガザンロワンは、自身の魔力で生み出した城の奥にいるとされる。城の周囲には人間の生命力を吸い取る魔法の霧を張り巡らせており、城も霧も魔王が滅びない限りは消滅しない。

「くふぅ……ああっ……こんな、オーガなんかのチンポがあたしの中に入って……ちくしょう……はぁ、はぁ……な、中で擦れて……くふぅ……ぅ」

「ぐふふふ……鍛えているだけあって、なかなかの膣の締まりだ。あまり男を知らんようだな。処女みたいなナマ堅さがある。この王の魔羅で、牡好みする牝ま○こに鍛えてやるからありがたく思え」

オーガの根城の王室で、オーガキングが正常位で女戦士を犯していた。

魔物は、がに股に開いた彼女の太腿の間に割り込んで、くびれたウェストをガッシリ掴み、腰を前後動させながら黒ビキニショーツをずらして挿入している巨根をじゅっぷじゅ

えっちシーン試し読み ここからスタート!

っぷと抜き差ししている。
女は二十代半ば頃。女豹を彷彿とさせる美貌の持ち主だ。セックスとは無縁そうなストイックな雰囲気を漂わせている。殺そうとした相手に組み伏せられている今は、悔しそうに唇を噛んでいるのだが、望まぬ官能で頬が紅潮していた。低めの凛声に甘ったるさが混ざっているのも、彼女が好きでしていることではない。
「それにしても、見れば見るほど見事な身体だな。戦う女ならではの、鍛えられたスケベな身体だ」
「うぁ……中で……ぁあ、オーガのチンポが大きくなって……くそぉ……あたしは、お前を興奮させるために鍛えてきたんじゃないのに……」
オーガ王が鼻を鳴らす。赤を基調としたビキニ鎧を身に着ける四肢は鍛え上げられているが、胸と尻の豊かさなど女性的な魅力にも溢れている。
怒り肩にフィットする肩当て。ビキニ水着と同じデザインの胸当て。腰当ては、腰を一周するベルトに腰骨と股間を覆うパーツが取り付けられているタイプで、その下は動き易さを重視した黒ビキニショーツ。足には膝から下をカバーする鉄靴を履いている。
軽快に戦える戦装束だが、九十センチを越えるたわわな巨乳と、五十センチ台のくびれたウェストを魅惑的に強調するという副作用も現してしまっていた。
両側頭部に羽飾りがついたヘルメットからは、艶やかな栗色の髪が伸びており、肩の辺

りでロールケーキのようにくるんと巻かれてあった。
「くくく、屈辱に歪みながら快感で赤らむその顔は堪らんな。そうして、ずっと俺を見上げていろ。……それとも、役立たずの相棒を見ている方が好みか？」
「っう……うううぅ……」
オーガが一瞥したのに釣られ、この魔物の顔よりも見たくなかった『相棒』の姿を見てしまう。女戦士の瞳で、絶望の色が濃さを増した。
相棒というのは、側に突き立っている大剣のことだった。大人の身長ほどもあるそれは、彼女が長い間苦楽を共にしてきた愛剣だ。しかし、今は敵の金棒でべこべこに歪まされていて、もう使い物にはならない。
その無惨な姿を見る度に、自分の敗北を思い知らされる。
捕虜にしたオーガキングが彼女の格好をそのままにし、台無しにした武器を側に突き立てているのは、彼女へそうした敗北意識を刻むこともあるのだが、彼女のフェティッシュな魅力を殺さないこともわけの一つだった。
女はオーガが支配する街の一つに密かに雇われた凄腕の傭兵だった。金と義憤から力を尽くして勇戦したのだが敗れてしまい、オーガキングの牝奴隷へと身をやつしていた。
周囲にはオーガの兵士たちと、彼女と大同小異の身の上の女たちがいる。衆人環視で辱められ、前者には勝利を、後者には絶望を思い知らせるタネにされているのだ。

「げははははは！　いい表情だ、ますますヤリ甲斐が出るってもんだ。このオーガ王ダルナモを喜ばせてるんだ。光栄に思えよ？」

彼女と一方的な異種姦を繰り広げる、オーガの王が哄笑する。

オーガは人型の魔物で、骨格も肉付きも人間とほぼ同じなのだが筋力は遥かに強い。大抵の個体は筋骨隆々の逞しい身体をしている。

体色が赤、青、緑、黄など一様でないことや、頭に角を生やしていることも特徴的だった。角の数は実力に比例し、一般兵士は二本である。

だが、女戦士を犯すオーガ王は五本角だ。額に反り返った一本が生え、髪のない頭部にも牡牛みたいな角を二対持っている。五本角の個体は他に存在せず、まさに国士無双なのである。

更に、ダルナモは普通のオーガよりも一回り大きい。体色は赤錆色で一際筋骨隆々な身体をしている。太鼓腹ではあるが、そこは筋肉がみっしり詰まった肉袋であり、たるむことなく張り詰めている。

身に着ける物は単独で狩ったドラゴンの皮膚で作った腰布だけ。

顔は角張っていていかつく、口元からは牙みたいな犬歯を覗かせている。

「さて、そろそろ種付けタイムといこうか」

窪んだ眼窩の底にある目が、獰猛さを増した。口元がニイッと歪む。

★第二話　勇者ルドベキア★

【オーガ】（虹源書房刊「世界の魔族大全」より）
魔物。人間に似た姿をしているが、筋力は人間を軽く越える。体色が赤、青、黄など様々で頭に角を生やしていることも特徴である。性格は粗暴で好色。言葉を喋るなど知能はそれなりに高いが、基本的には人間に劣る。金棒を好みこれを武器とする性質がある。（後略）

女勇者ルドベキアは、村内に入った直後から纏わりつく視線を感じていた。
一人やふたりではない。自分を見つけた村人全員がそんな風に見ている。今いるのは宿屋の食堂で、カウンターの向こうにいる店主以外は人はいないのだが、壁の向こうに複数の気配を感じていた。
（雰囲気が変だ……よそ者を警戒しているっていうのとは感じが違うようだけど）
胸中で独りごちる。理由はどうあれ、他人に視線を向けられるのはあまり好きではない。
今は魔王を倒した勇者であっても、数年前まではただの村人であり、家族と周囲の人間以外には関心を払われないごく平凡な存在だった。そのため、注目されるのには未だに慣れていないのだ。

そんなルドベキアは十代後半で、短い髪に、澄んだ瞳の凛々しい顔貌をしている。中性的な顔立ちなので、髪を伸ばしてドレスを着れば、清楚感溢れる美女になるし、短い髪のままで洗練された鎧を着込めば凛乎とした若い騎士に変貌する。

今は、装備のほとんどをサンドバックみたいなザックに詰め、何の変哲もない旅人姿をしている。勇者の人相を知らない人間が見たらそうとはまず分からないようにしているのは、人目を集めたくない気持ちからだった。

ただ、重ね着しても盛り上がりを隠せない百センチ近いバストは難物で、そう言う意味では嫌でも男の注目を浴びてしまうのだが。

ギィィ……。

宿兼食堂の扉が開いた。腰の曲がった老人が入ってくる。小走りで宿の中年店主が駆け寄って、ふたりでぼそぼそ話した後に老人が近づいてきた。

「もし……失礼ですが、もしや勇者ルドベキア様では」

しわがれた声は、すがるような雰囲気を孕んでいた。

「は、はい……そうですが」

老人のただならぬ様子にルドベキアは頷いた。ひょっとしたら、自分の力が必要とされているのかも知れないという予感が頭をよぎる。

老人の顔がぱっと輝いた。後ろに控えていた中年も嬉しそうに目を見開いている。

一呼吸遅れて壁の外でわっと歓声が上がった。三人しかいなかった食堂へ大勢の村人がなだれ込んできた。

「やはり勇者さまだったんだ！」

「噂通り、こんなに凛々しいお方だったとは……！」

「やったぞ、あのオーガたちもこれまでだ！」

口々に歓声を上げる彼らの様子に、ルドベキアは目を白黒させた。

「驚かせて申し訳ありません……実はこの村はオーガに支配されておりまして……勇者様、魔王を倒したあなた様に、オーガ退治をお願いできませんでしょうか」

他の村人同様に喜悦を滲ませつつ、老人が重々しく言葉を続ける。

「やつらは魔王が出現した頃にやってきて不定期に貢ぎ物を要求しております……金や物や食料などだけでなく、女もよこせと……ご存じの通り、オーガは大木を小枝のように、家屋さえも苦もなく金棒で潰してしまう相手……我々村人ではとても敵いません……従うしかありませんでした」

宿に入る途中、ぐちゃぐちゃに潰された家や、何本もの樹木が薙ぎ倒されている場所を見かけたことを、ルドベキアは思い出した。

「領主や国王は討伐軍を差し向けてはくれないのですか？」

「同様の被害を受けている近隣の街や村の代表と共にお願いした際、一度だけ出していた

だいたのですが……」

返事の途中で言葉を濁す。悲しそうに俯く姿はその結果を雄弁に物語っていた。

「分かりました。ボクの力は困っている人を助けるためにあるもの。きっと、あなた方を苦しめるオーガを倒してみせます」

椅子から立ち上がり、胸の前で握り拳を作ると、人々に向かって断言した。

勇者の力強い声は、草原の涼風みたいに清涼な美声で、聞く者を勇気づける。村人たちはまた沸いた。

翌日の朝、村の誰よりも早く起きた勇者はカウンターに宿代を置いて目的地へと発った。

オーガの巣はおよそ十キロほど離れた山奥にある。村人の話によると、ずっと昔に滅びた国が使っていた砦を改修して根城にしているらしい。

空を覆う黒雲でいつも以上に暗い世界の中、事前に聞いていた森の道を勇者は独りで歩いていた。

今はもう、旅人姿はしていない。黄色の長袖シャツとタイツを穿き、裾が股下までくるアメシスト色のノースリーブの上着を着て、腰にベルトを締めている。その上に、背中を覆うタイプの濃紺マントを羽織っていた。

使い込まれた茶色い皮の長靴とグローブも身に着け、額には青い宝石が埋め込まれたサ

ークレットを被っている。
使わない持ち物を入れたザックを肩に背負い、腰の右には道具袋を、左には剣帯を下げていた。常に柄の端に手を置いて、いつでも抜刀できるようにしている。
（尾行されてる……）
村を出て一キロほど進んだ頃、ルドベキアが目を細めた。
奇妙な気配は、村を出てからつかず離れずの距離を維持している。自分の痕跡を消すのに慣れていない素人だとはすぐに分かったが、だからといって気分のいいものではない。
「ボクをつけているのは誰だ、出てこい！」
凛乎とした声が響き渡る。少ししても何も起こらなかったが、殺気を込めて剣を抜こうとした時、十メートルほど離れた茂みから女の子が出てきた。
「ごめんなさい、勇者さま……」
十代前半位の活発そうな女の子だった。髪をふたつに分けて三つ編みにしており、鼻梁の周りにそばかすがある。見覚えのある子供だった。
「君は確かアリナだったね……どうしてついてきたんだい？」
昨晩、宿屋で開かれた宴の席で、しつこく武勇伝をねだってきた村の子だった。
名前を覚えられていたことに喜んだ様子で、叱られてうなだれていた顔が嬉しそうに紅潮し始めた。

「勇者さまのお手伝いをしたいと思いました。わたし、この辺には何度も来ているから、道案内とかの役に立てると思います！」
「だめだ、村に戻るんだアリナ。ボクはこれから恐ろしいオーガと戦いにいくんだぞ？」
険しい顔で冷淡に言う。
「知ってます！　でも、勇者さまだけに危ない目にあわせて、わたしたちは村で待ってるだけなんておかしいです！　だから、わたしはお手伝いしたいんです」
村娘は引き下がらなかった。拳を握り締めながら、声を張り上げる。真摯な目は強い意志を感じさせ、どんなに凄んでも引き下がらないと思わせた。
（まるで昔のボクみたいだ）
ただの村人であり、世界会議で勇者と認定された時に授けられた名前でなく、親からもらった名前で生きていた頃、化け物の横暴を憎んでも何の力もないルドベキアにはどうすることもできなかった。家族や子供を守るために散っていく大人を見るのが辛く、何度も自分が何とかしたいと考えた。
「分かった。昨日、村の人に教えてもらった情報を基にするよりも実際に知っている人に案内される方がいいかも知れない……でも、ボクの言うことは必ず聞くんだよ。逃げろと言われたら必ず逃げるんだ、いいね？」
アリナの姿に昔の自分を重ね、つい同道を許してしまう女勇者。村娘は花が咲いたよう

な笑顔を浮かべて勢いよく頷いた。

それから勇者は、地理に明るい村娘の案内に従って進んだ。必要な会話以外交わされない道程で、生い茂る木々の隙間から覗く空模様も曇天だったが、勇者と一緒に歩けることにアリナは満足そうだった。

「あの丘陵を越えれば、オーガの集落が見えます」

「分かった。アリナ、ここまでありがとう。君はもう村に戻るんだ」

「そんな……わたし、道案内以外でもお役に立ちたいです！」

食い下がる彼女の頭に手を置いて、勇者は優しく微笑んだ。

「君は十分役に立ったよ。ここからはボクの仕事だ。君が見せてくれた勇気と気持ちはボクが引き継ぐ。きっとオーガをやっつけてみせるからね」

アリナは嬉しそうな、悲しそうな顔で尚も何か言おうとしたが、

「貴様ら、そこで何をしている！」

右手の二十メートルほど先にある大木の陰から、三本角の青オーガが躍り出た。

「しまった……」

舌打ちしながら荷物を放り投げ、勇者はオーガに向かって駆けだした。草木の踏みしめられる音がほとんど一音節となって流れ、突風みたいな風切り音がアリナの耳を打った。

「やるってのか、三本角のこのオレと。身の程知らずめ！」

オーガが金棒を振り上げ、目前に迫った人間めがけて振り下ろした。オーガは角の数に比例して強力で、最弱である一本角のオーガの一撃さえ、牛を一撃で殺せる威力を持っている。三本角ならば家屋を一撃で倒壊させることもできるだろう。

「ふんっ、そんな攻撃……！」

しかし、ルドベキアは全く恐れていない。鋭い眼光で相手の動きを追いながら、流れる動作で剣を抜く。その時、雲の切れ間から陽光が差し、スポットライトみたいに彼女を照らした。

彼女の愛剣は、刃渡り九十センチ、刃の肉厚五センチの白銀の剣だった。刀身には複雑な幾何学模様が刻まれている。

「ハーッハッハッ！　そんな小枝みたいなクズ剣でオレの身体を切れるものか！」

オーガが哄笑する。ただでさえ逞しかった身体が瞬時に倍近くまで膨れ上がった。筋肉を緊張させて防御力を上げたのだ。張り詰めて隆起した全身は、フルアーマーの戦士を彷彿とさせる。

ルドベキアは構わない。斜め下から掬い上げるように愛剣を振るう。壁の隙間を突風が吹きぬけたみたいな音が生じ――、

ザキンッッッ！

「何だと、オレの金棒が斬られたぁっ！？」

丸太同然の太さの金棒が、半ばから切り飛ばされた。
自分が持つ残骸と、遥か遠くで転がる欠片とを信じられないという目で交互に見るオーガ。
「ハアッ！」
その隙を見逃さず、勇者は冷徹に魔物の胴を薙いだ。鎧じみていた筋肉の身体が、羊皮紙みたいにサックリと裂ける。
斬切面から夥しい血が噴出し、オーガは口から血を吐きながら仰向けに倒れた。
「ごふぅっ……ちくしょう……オレの身体が……キングに鍛えられたこの筋肉が……そんなひょろい剣で……」
絶命寸前のオーガは、ぜえぜえとあえぎながら、首から下げていた笛を噛んだ。
ピーッッッ！
甲高い笛の音が響き渡る。自分を倒した女へニタリと笑いかけ、そのオーガは事切れた。
笛の音はオーガの根城に届いたはずだ。すぐにオーガたちがやってくるだろう。
「しまった……こんなはずではなかったのに……！」
ルドベキアが歯噛みする。
多数の人間が捕らわれているという話を聞いていたので、ルドベキアはまずはその人々を解放することを考えていた。

（ここは何とか耐えて、逆転のチャンスを待つんだ）

捕まってからずっと快感責めを受けていたせいで、心身が大分弱っていたが、好機が訪れた時に全身全霊で戦えば勝機はあるはずだ。慢心している敵は、精霊王より授かった愛剣をすぐ側に置いている。

快感責めでぼやけていた意識が、急速に力強くなり始めたのだが――、

べちょっ……ぬろ～～～っ、れろれろれろれろ。

「ひぃっ、お、お尻が……ああっ！」

桃尻の両臀部をガッシリ掴んだオーガ王が、尻穴に舌を入れてきたのだ。

村人も、部下のオーガたちも見ているというのに、よく晴れた空の下、誰よりも高い場所で女勇者の尻穴をしゃぶっている。

「ぁあああ、やめ……ッ！」

四つん這いのまま、背中がビーンと仰け反った。犬の伸びみたいな格好で、女勇者はオーガの尻舐めを受け続ける。

臀裂の底にオーガの唇が密着し、荒い鼻息がくすぐってくる。

長い舌が肉洞内部を埋め尽くし、オーガの体温をなすりつけながら内側から押してくる。

ヌメるプリプリの肉がみっしり埋まる状態が続くと、胸が詰まり体温も上がってくる。

排泄の肉道を舐められるおぞましさや屈辱を覚えるが、不自由な体勢を強いられ、下手

えちシーン読み試し スタート

に動けば勇者の力の根元である処女膜を破りかねない状況にあり、更にはオーガの怪力でお尻を押さえられていたのではどうすることもできない。
「っくぅ……ああっ……あああっ……ひぅん……お、おくまで来てる……オーガなんかの舌がぁ……んンッ！」
舌がそよぐと、腹の底に重たいむず痒さが走る。敗北後の責めは尻孔も対象にしており、オーガたちが見ている中で開発された。
最初は気持ち悪くて苦しいだけだった。けれど、オーガの子供を妊娠できる薬を尻孔に流し込まれて中をヌルヌルにされた後、ダルナモのプリプリざらざらした舌で抉られている内に、舌と肉道とが馴染み始め、苦しみが快感に変わってきた。
今も尻を責められることはおぞましい、変態的だ、とは思うのだが、その一方で背筋がゾクゾクする妖しい快感を享受できる身体になってしまっている。
「ぶへぇ……うめぇ尻だぜ。舌が締め付けられるのが堪らねぇな」
口を離して舌なめずりをするダルナモ。薄いセピア色をした入り口の縦皺が、自分の唾液を浴びてヌラヌラ光っている様子を凝視する。
「そろそろ尻のバージンを奪うとするか。俺に刃向かった報いとして、勇者さまにはここでアナルセックスの相手をしてもらう……愚民どもに、尻でも感じる淫乱女になったことを見せつけようじゃねぇか、えぇ？」

「なっ、お尻でセックスだって⁉　……お尻に舌だけでなく、男性器も入れる……？　そ、そんな変なこと……！」

子作りをするための必要最低限の知識はある彼女だったが、尻孔で肉悦を享受するなどというアブノーマルな行為については知らなかった。

しかも、そこは排泄器官なのだ。そんなところを使うセックスなどとても信じられない。

だが、ダルナモはヤル気満々で舌なめずりをしている。そんな仕草を見るに、オーガ王の頭の中では自分はもうお尻を犯されていることだろう。この三日間の調教でそれ位は分かる位に、ダルナモのことは理解させられている。本当に言葉通りに実行するつもりなのだ。

「そんなのだめだっ……お尻でセックスだなんて……そんなのを村の皆に見られるなんて……！」

ルドベキアは心の底から動揺した。オーガたちの前で調教されていた時も頭の中が真っ白になる位の恥辱と屈辱を感じたというのに、同じ人間で自分を勇者と知る者たちの前で、尻孔を使った異常な性行為を見せたのなら、もう自分は人間社会では生きていけないだろう。

オーガとアナルセックスした女勇者として、汚物でも見るような目であらゆる人間に見られ、末永く語り継がれるに違いない。

「いやだ……あぁぁ、いやだぁ……！」

快感で脱力した身体にありったけの力を込めてオーガから逃れようとした。とても勇者には見えないみっともない這いつくばりようを衆人環視の中で披露してしまったが、そんなことを気にする余裕もなかった。とにかく、懸命に離れようとした。

だが、十センチも進まない内にあっさり尻を掴まれた。オーガの怪力が豊満な両臀部をガッシリ捕らえ、もがいてももう、全く動かない。

「いやだぁぁぁ……あ、ひぃっ、あ、あついっ、あついのが……そんな物を近づける――アァ！」

セピア色の入り口に、オーガの剛直の先端が宛てがわれ、赤熱する勃起の熱と肉の量感がなだれ込んできた。そして、そう思った矢先に肉洞内部が一気に埋められた。

高熱を撒き散らす勃起ペニスが内部を自身の形に押し広げていく。事前に十分に馴致されていただけに、挿入はスムーズだった。

「ぅあああ……ボクのお尻の中にオーガのペニスが……！」

初めてパイズリをさせられてからも、何度も胸で相手をさせられていた肉棒の感触が、今は排泄道に居座っている。

「ぐへへへへ、リングみてぇな分厚い肉が四方八方から押してくるぜ……締まりがいいだけじゃなく、ちんぽで擦るには丁度いい硬さだぜ」

「あ……はぁ……はふぁ……ああっ……んふぅ……中で……擦れて……んんっ……」

流し込んでいた唾液を潤滑油にして、オーガが腰を振ってペニスを抜き差しする。
人間以上のサイズのペニスに、初めは苦しい圧迫感を感じていたが、開発が進んでいた尻孔だっただけに、程なく馴染んできた。
脂汗を垂らしていた勇者の口からは甘ったるいあえぎ声が多くなり、太腿から尻にかけてが時々気持ちよさそうに痙攣する。
「げははっ、どうした勇者さま。オーガにケツを犯されて感じてるのか？　気持ちよさそうな顔しやがって」
紅潮した顔。八の字にたわんだ眉。目尻は力をなくして垂れており、閉じない口の端からだらしなく涎が垂れている。
「だれ……が……か、感じてなんか……お尻で感じたり――ンンっ！」
オーガの嘲笑に反骨精神が戻っても、尻孔を数回擦られるだけで簡単に嬌声を上げてしまう。
「本当に、感じてるのか……勇者様だぞ？」
「信じられない……よりによってお尻なんかで気持ちよくなっているの？　しかも相手はオーガなのよ？」
冷ややかな視線を向けるだけだった村人たちが、悪罵を囁き合う。
ダルナモがにたりと笑った。村人たちの罵倒を更に引き出すかのように、扇動的な銅鑼

声を響かせる。
「尻の肉が俺のちんぽを食い締めてるぞ、勇者さまよぉ。気持ちいいぜぇ……こんなにいい尻は初めてだ……娼婦も顔負けだなぁ」
「あぅっ……ボクは勇者だ……娼婦と比べるな……ふぅああっ……おおっ……おほぉぉぉ……！」
前かがみになり、突き出た腹と胸板のラインを女勇者の背中に密着させると、奔放に弾んでいた両胸を鷲掴みにして、オーガの王はドスドスと突き始めた。
快感慣れした身体を、逞しい牡に責め立てられる圧倒的な快楽に、ルドベキアの口から獣じみた痴声が迸る。
秘所から垂れる愛液の量が増し、大陰唇に挟まれている愛剣の柄に伝って、床に染みを作る。
「あんなにおま○こ汁を垂らして……自分の大事な剣を汚しているのに……快感を感じてるんだ」
「もう、すっかりオーガのセックス奴隷になってるんじゃないか？」
「わしらは、あんなやつを頼りにしたのか……」
オーガに嬲られる一方の勇者にぶつけられる村人の罵りが、次第にエスカレートしている。

（皆がボクを……あんなに怖い顔で……）

敵意めいた感情を煮立たせる村民たちに、流石のルドベキアも恐ろしさを覚え始めた。背徳のアナルセックスのせいで心が弱っていたことも拍車をかけていた。

自分が勇者だと分かった時や、オーガ退治を引き受けた時はあれほど喜んでいたというのに。

その落差の分だけ、怖かった。虐げられる人間を救いたいと思う彼女も、自分にこれほどの悪感情をぶつけてくる者にも同じ風に守りたいと思うことは難しかった。

「勇者さまよぉ……愚民どもは、もうすっかりお前が負けたと思ってるぜ。ここら辺で、詫びをいれといた方がいいんじゃねぇか？　期待を裏切って、ごめんなさいってな。そうすりゃぁ、あいつらもお前のことを許すかもしれねぇ。オーガに慰み者にされる、可哀想な女だと見てくれるかもな」

正常な判断力が磨耗したルドベキアは、オーガの言葉に釣られてしまう。村人の悪意から逃れたい心が、言葉を紡がせる。

「ご、ごめんなさいっ……あぁっ、勇者なのに、皆を救えなくて……ほあぁぁぁ……負けてごめんなさいっ！」

「謝ることはそれだけか？　勇者のくせに、魔物とアナルセックスして、よがってるのはどうでもいいことなのか？　あん？」

「あぁあ、オーガとアナルセックスしてごめんなさいっ、勇者なのに、お尻で感じちゃってすみませんっ……ぁあああ……おおほほほおおっっっ！」

惨めな謝罪をしていると、頭の後ろが軽くなって快感が大きくなっていく。はしたない声もしどけなさと声量を増していた。

擦られる度に肉洞内で快感の火花が飛び散り、鼓動を早くする。股間からは途切れることなく愛液が流れ、剣と床を汚している。

荒々しく胸を揉まれるのも快美だった。尻孔快楽と結合し、より深い陶酔を味わわせてくる

扇情的な衣服で身を包む四つん這いの女体は、汗に塗れて上気していた。息も荒く、まるで犬のよう。

オーガに犯されながら無様に謝罪する姿は、人類の希望を背負い、魔王を倒した人物には到底見えない。

「らめえっ、ああっ、いくぅ、お、おしりで、いっちゃうぅぅぅ……んんあああっ！」

この上なく惨めであるのに、尻孔快楽は止まらない。目の前が真っ白になり始め、心地いい胸の詰まりが弥が上にも高まっていく。

オーガに調教されている間に教え込まれた卑語を声高に口にしてしまうほど、アナルセックス快楽は勇者を前後不覚にしていた。

辛い思いをして鍛えてきたものが水の泡となり、もう、魔物や魔族から人間を守ることはできなくなる。

その摂理が、ルドベキアが一線を越えるのを阻止している。

欲望と良心の葛藤で、女勇者が苦悶する。顔にびっしり脂汗が浮かび、噛み合わせた奥歯が鳴った。

「我慢するな。そんなことをしても無駄だ。他の連中はもう、お前を勇者とは見ていないぞ」

その時、男に握られていた尻たぶが熱い亀頭で串刺しにされた。

「ひぃあぁ……熱いお肉が……ボクのお尻に……！」

高熱を纏ったプリプリの触感を押しつけられる微快感に、ルドベキアが背中を仰け反らせた。

「ああ、やわらけぇ……こうして擦りつけるだけでイキそうだぜ」

興奮した村人が押しつけてきたのだった。だらしのない顔を取り繕うこともせず、利き手で逸物を握り、亀頭の先や皮の繋ぎ目などを自分勝手に擦りつけてくる。

「あぁあぁぁあぁあ、だめ……熱いの、くっつけないでぇ……我慢できなくなるぅ……」

伝わってくる牡棒の熱と圧迫感が性感を高める。肉棒で尻穴を満たされ、抜き差しされた記憶が頭の中で何度も蘇り、処女膣も牡肉棒で満たされたいという欲求が強くなり、心のどこかからオーガへ屈服して、思い通りにしてもらえという囁きが聞こえ出す。

こちらから
こちらスタート!
こっちシリーズ
試し読み

（だめ、だ……気持ちを強く持つんだ……あぁ、でも、これ以上同じ風に、ボクの身体にペニスが触れてきたら……本当に堪えられなくなる……お願い、村の皆……正気を保って……）

オーガや我を忘れた村人の行動に必死に耐えつつ、願うルドベキア。だが――、

「はぁ、はぁ、オレはこの太腿だ……ムチムチの黒ストッキングの太腿たまんねぇ……」

「ああっ、柔らかい尻だ……亀頭が全部くるまれて……突くと気持ちよく押し返してくる」

「勇者の身体で気持ちよくなるなんて、もう二度とないかも知れないんだ……きっちり楽しんでやる」

オーガと村の仲間に責められる、美人勇者の痴態ですっかり自制心を失った村人たちが襲いかかってきた。それぞれのフェチズムに従って好きな場所をひったくり合い、気兼ねなく犯せる女に、遠慮なく劣情をぶつけ始める。

「そんな……みんなが……あふぅああっ……！」

醜い言葉が胸を鈍く打つ。尻や太腿に突き立てられる肉棒の存在感が、人間に裏切られた悲しみを大きくする。

その一方で、快楽への欲望も増大する。自分を囲む男たちの熱気。はぁはぁと忙しない息遣い。彼らから滲み出る欲望の丈が、最後の一線で踏みとどまっていたルドベキアの心にも染み込んでくる。

保身と情欲に塗れた人間の醜い心が、最後まで自分の心とも戦っていた健気な女勇者の背中を押して、諦堕の奈落へ続く坂へと突き落とした。

「ぁああ……もう、いい……勇者でなくていい……もう勇者はやめる……から……ボクの処女を奪って……く、ください……気持ちよくして……お願い……します……」

「勇者ルドベキアさまが、オーガの王のダルナモの魔羅で処女膜を破って欲しいんだな？勇者でなくなってもいいんだな？」

女勇者は、念を押されて少し躊躇う様子を見せたが、オーガにギュッと胸を揉みしだかれた直後、あんっ、とあえいでコクンと頷いた。

魔王を倒し、ダルナモの大勢の配下も苦もなく葬った女勇者が、力を失うことを知りつつ、オーガに処女を捧げると完全に決めてしまった瞬間だった。

「よぉし、いいぜ……そら、俺のチンポが勇者様の処女ま○この端にぴったりくっついたぜぇ」

獰猛な笑みを浮かべながら、そそり立つ逸物の先を秘所の入り口に宛てがう。

下半身や胸に快感を与えられ、爪先で処女膜を焦らされたせいで、ムキ卵のような初々しい秘所はぐっしょりと濡れそぼっていた。

じゅぶぅ……。

「はぁああ、入ってくるぅ……オーガのが……ああっ、ボクの処女膜に触れて……ああっ、

あああああ」

大陰唇を巻き込みながら膣口を抜けてきた先端が処女膜に接触した。

「破るぞ……お前の……勇者の処女膜を、俺が……オーガの王が今破る……うおおおおお！」

亀頭のごくごく先端を処女膜の中央の穴にはめ込み、そのまま破らない程度に腰を数回揺すった。

そして、真ん中に窪みができるほど尻たぶを強ばらせて、一気に突破する。

ズウゥメリッッッ!!!

「ぅあああああっ！　い、痛い……痛いぃ……！　こんな痛み初めて……っう……んあああああッ！　まだ入ってくるぅぅぅ」

メリッ……ズブブ……ッッッッッ！

破瓜喪失の傷みが収まらない内に、オーガは更に奥を目指す。

「ぐはははは……やったぞ、勇者の処女を奪ってやった……このまま奥まで征服してやる」

尻孔の時と同じく、膣が逸物の形に変わっていく。押し出される愛液に混じって鮮血が漏れ、逸物の竿を伝っていく。錆の臭いが周囲にくゆる。

「んあああっ……はあっ、はあっ、ああああ……んふあっ……ふわふわする……ボク……もう、

慣れてきた……？　初めて……なのに……はぁ、はぁ……」

オーガは乳悦を引き出す胸揉みを続けており、下半身も人間の男が責め立てている。

途切れない快感が傷みを和らげ、牡に征服される被虐的な喜びをルドベキアに与えていた。

ゴツッ……ズリュ、ズリッ……。

「うあああっ、おくっ、奥に当たってる……ふぅあああっ、押されてるっ、子宮の方に押されてるぅぅっ！」

歯を見せる笑みを浮かべながら、オーガが膣の最奥を圧迫してくる。胸板と太鼓腹をルドベキアの巨乳とスレンダーなお腹にくっつかせ、片手で肩胛骨を抱き締め、グイグイ密着させながら、押し込んでくる。

「あああっっっ、お尻っ、お尻のおちんちんが……オーガのもので埋まったおま○この裏をごりごりって……こ、擦れるぅぅッ！」

膣がみっしり埋められたことで、尻孔を擦られる愉悦も大きくなっている。気を失ってしまいそうな鮮烈な快感が尻の中を縦貫していた。

「おらおら、俺がま○こも気持ちよくしてやるよ……処女だった上に身体がよく鍛えられてるから……ふぃ～～～気持ちいいぜぇ。これほどの食い締められる快感は、今まで味わったことがねぇなー」

ダルナモが動きだす。初めは自分のペースでゆったりと腰を前後させていたが、尻孔を出入りするペニスと徐々に動きを合わせていく。

「ふぁああっ、いいいっ、すごいいいっ、前も後ろもゴリゴリッてぇ……おかしくなるっ、ボク、おかしくなっちゃうよぉぉぉ！」

薄い肉壁を隔てて、二本の肉棒が動いている。同時に奥を目指し、かと思えば、一方が肉洞を満たしたのと入れ違いに一方が肉孔内を空にする。人間と魔物が、一人の女を舞台に息の合った連携を展開する。

両孔を満たされる充填快楽と、前か後ろ一方のみに牡肉を込められる快感、両方を空にされる空虚感。それらがランダムに繰り返され、女勇者だった者は、予想できない甘美に翻弄され、陶酔の奈落へと堕とされていく。

「おおおっ、いくぞ勇者ぁ、このまま、お前のま○この中でザーメンを吐き出してやるっ！」

処女でなくなったばかりの膣内を研磨していた肉棒が、ドクドクと脈動しながら膨張している。

膣壁に擦りつけられている熱感も火傷を心配するレベルまで上昇していて、膣内は燃えるように熱かった。

「あぁぁっ、オーガに……オーガの精液だされちゃう……ボク、人間なのに、オーガの精液を受け止めさせられちゃう……！」

人間としてあってはならない事態に戦慄する女勇者。しかし、それは一瞬だった。
ふと、尻孔射精された記憶が蘇る。ネバネバの汁で奥の奥まで満たされた快感は、思い出すだけで胸をドキドキさせ、また味わいたいという欲望を湧出させる。
あの快美を膣内で味わったらどんなに気持ちがいいのだろうか。そんな背徳感が背筋をゾクゾクさせ、膣内射精への嫌悪感を塗りつぶす。
「出して、精液出してっ、ボクの中に、いっぱい出して気持ちいい思いをさせてぇ！」
村人たちに聞こえるほどの音量で、ルドベキアは叫ぶ
彼女の浅ましさを反映し、肉ヒダが愛液を吐きかけながら魔物の巨根に絡みつく。
「よぉし、だったら薬を飲め！　オーガのザーメンで孕む身体になる薬だ……人間の男とガキを作れなくなる副作用つきだがなぁ……さぁ、それでも飲むか勇者さまよぉ……いっとくが飲まなきゃ中出しはなしだぜ！」
アイコンタクトで話題の薬瓶を手下に持ってこさせ、そのまま自分の口に含ませる。
口移しで飲ませようというのだ。しかも、自分からは動かず、決意した彼女が自らキスしてくるのを待っている。
オーガは激しい抜き差しもやめた。亀頭を子宮口に密着させて、押し込むように尻での字を描く。
処女喪失直後の女でも焦れったくて仕方なくなる、いやらしいもどかしさを叩きつけて

くる。
「いやだ、もう、焦らされるのは……！　妊娠するから……オーガの子を産んでもいいから精液欲しいっ」
女勇者は自分からオーガに唇を重ねた。尖らせた舌先で唇を割り、舌の上を水路にして魔物の口内の液体を飲む。
無理矢理キスされた時はあれほど嫌がっていたというのに、今は逆に彼女がオーガの唇を求めている。
「ぷはぁ……へへへ、飲んだな……これでお前はもう後戻りできねぇ……快楽欲しさに人間をやめたんだぜ……勇者の力を持ったオーガの子供を孕ませてやる」
総仕上げとばかりに、オーガの抜き差しが再開された。堕とした女の子宮に向かって射精して、女と自分の血を引く子供を孕ませることのみを考えた荒々しい出し入れだった。
引き抜かれる時に顔を出す極太ペニスは、愛液に塗れてヌメ光っている。破瓜の血はもう流れ尽くしていた。
（ああっ、精液出される……ボク、オーガの子供を妊娠しちゃう……人間の男の人と子供を作れなくなる……でも、そう思うとゾクゾクして……もっと気持ちよくて）
墜ちた思考をする勇者。巨根にヒダが絡みつく膣は、絶頂の兆しを見せていた。
精液を一滴でも多く受け取れるように奥の方が広くなり、少しでも多く子種汁を搾り取

るために入り口が狭くなってきている。
「はぁ、はぁ、出すぞ勇者、俺のザーメンを……おおっ……おおおっ、くらえぇぇぇ!!」
猛烈な締め付けに逆らって何度も出入りしていた怒張が、ドスンと子宮口にめり込んだ。しぶいた愛液で塗れたオーガの下腹が、ルドベキアのそれと密着する。
ドビュゥゥゥゥゥ!!! ビュルルルッ、ドクンッ、ドクンッ、ビュッ、ビュッ〜〜〜〜〜!!
「ぁひあああっ〜〜〜〜」
子宮口の肉にくるまれた亀頭が大きく震幅し、膣内を揺るがした刹那、マグマのように熱くドロドロの精液が放たれた。
女勇者もその衝撃で登り詰めた。膣内で牡汁の直撃を受けながら、背筋を仰け反らせ、頤をはね上げる。上半身で弓の軌跡を描きながら、総身をビクビクと痙攣させる。
「で、でてるぅぅぅっ、ボクの中に精液きてるッ!」
灼熱の濁液が子宮口を溺れさせ、膣内を満たしていく。処女だった肉ヒダの内部にも染み込んで、膣内射精された実感をルドベキアに伝えてくる。
「あぁっ、はああっ、ぁあ、妊娠しちゃうっ、ボク、人間なのに……ああっ、勇者なのに……おま○こイキながらオーガの子供を孕んじゃうッ!」

精液は濃いほど女を孕ませ易い。膣内射精時の快感が大きいほど、妊娠の確率は上がる。そんな知識が脳裏に浮かぶが、両方が揃っている現状に恐怖も後悔もない。

「お、オレも出すぞ……勇者の尻孔に、射精するっ」

延々と尻を責めていた男が吠える。ペニスが最高潮に膨らんで、数回ビクビクと振動した後に、精液を吐き出した。

その男の射精申告に触発されたのか、尻たぶに亀頭をくるんで腰を前後動させていた者も、太腿にペニスを突き立てていた者も、ストッキングに擦りつけていた者も皆、吐精する。

「あぁぁぁああひいいいうううぅぅ！」

次々に牡汁が直撃する快感に、処女でなくなったばかりの若い女がまた絶頂を果たす。

そんな彼女を、オーガは萎えないペニスでまた責め立てる。

「あひあぁぅうぅぁ……こわれるぅ、ボク、こわれちゃうよぉぉぉ」

「心配するな。勇者さまだった女が、そう簡単に壊れるもんかよ……村の連中だけでなく、俺の手下も使って何度もイかせて、一日でも早く俺の血を引くオーガの勇者を孕ませてやるからな。母娘ともども、殺した手下の分まで俺のために働いてもらうぜぇ？」

囁いて、オーガの王は女勇者に接吻する。

精液と愛液でヌルヌルの膣内を、人並み外れた逸物でかき回され、尻を始めとした下半身を人間に責め立てられるルドベキアは、自分から舌を絡めながらされるがままになって

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/